

東海道の宿場町における 近世の想起素材とその存在状況 —宿場町をめぐる旅からみたその意味—

浜本 嶺¹・齋藤 潮²

¹学生会員 東京工業大学環境・社会理工学院土木・環境工学系都市・環境学コース（〒152-8550 東京都目黒区大岡山2-12-1, E-mail:hamamoto.r.aa@m.titech.ac.jp）

²正会員 工博 東京工業大学環境・社会理工学院 教授（〒152-8550 東京都目黒区大岡山2-12-1, E-mail:saito.u.aa@m.titech.ac.jp）

現代に旅行会社では「宿場町をめぐる旅」といったツアーが組まれている。旧宿場町には、往時の建造物などを街並み内に残す地域もある一方、石碑や道標などしか残されていない地域もある。そこで、地域ごとに宿場町を想起させる体験が異なることが、旧宿場町を連続的に訪れる魅力の一つであるという立場から、東海道の旧宿場町を対象に、宿場町であったことを想起させる要素がどのように存在しているかを示し、また、旧宿場町の現代の土地利用を把握した。この2項目においては、東海道の「宿場町をめぐる旅」は「地域間の差異」を感じることができ、それぞれの歴史や街並みの変化を体感することができる。歴史文化を伝える地域に多くの観光客が訪れる近年において、新たな観光まちづくりの可能性を示唆した。

キーワード：宿場町,想起素材,土地利用,観光まちづくり

1. 序章

(1) 背景と目的

「宿場町をめぐる旅」など共通した歴史的背景を有する地域をめぐる人々がいる。旅行会社で旧街道をたどるツアーが組まれているほか、インターネット上には旧宿場町をめぐったこと報告するブログ等が存在している。さらに、旧宿場町をめぐるためのガイドブックなども出版されている。

このような観光では、共通の歴史的背景を持った地域を連続的に訪れることで、「地域間の差異」を体験しながら、様々な街並みの中から歴史的背景に思いを馳せることができる。もし仮に全ての地域において同様な街並みが展開されていた場合には、すべてをめぐるモチベーションは生まれまいだろう。その点に、伝統的建造物群保存地区などに指定されていないような地域も、一連の東海道の旧宿場町というシリーズとして訪れる意味があるのではないだろうか。

旧宿場町には、「本陣跡」や「旅籠跡」など宿場町という歴史的背景を現代に伝える要素が点在している。しかし、その有無や形態は地域によって様々である。本研究では、これらを宿場町という歴史的背景を想起させ得るもの（以後、「想起素材」と呼ぶ）として捉え、各地域についてどのように想起素材が存在しているか調査し、地

域を類型化する。

一方、同様に想起素材が存在していたとしても、その地域の環境によって想起の体験は異なるだろう。そこで、地域の環境として、旧宿場町の現在の土地利用を調査し、類型化する。

そして「地域間の差異」に宿場町を一連のシリーズとして訪れる意味があるという立脚点から、類型をもとに全地域における想起素材の存在状況・土地利用状況の「ばらつき」、連続的な体験としてその差異に対する「期待値」を算出する。その上で「宿場町をめぐる旅」を考察することとする。

(2) 研究の対象

本研究では、江戸時代に参勤交代をする大名の半数以上が利用し、他の街道に比べても公家や幕府役人、庶民の往来が多かった東海道とその宿場町を研究の対象とする。

(3) 研究の構成

2章で東海道と宿場町について整理した上で、3章では想起素材の存在状況、4章では旧宿場町の現在の土地利用を調査し、類型化する。5章で想起素材と土地利用の「ばらつき」「期待値」を算出し、「宿場町をめぐる旅」を考察する。

(4) 研究の位置付け

関連する研究として、旧街道に沿って歴史的な街並

みの保全と観光の共生について言及した研究¹⁾ などがあ
る。一方、本研究の関心は旧宿場町に残されている近世の
名残であり、現代に残るかつての宿場町を想起させ得る
要素について言及した研究はなく、独自性がある。

2. 東海道の宿場町

東海道の宿場町は1601年に東海道に宿駅伝馬制が定め
られ整備された。宿場町は街道に沿った線形の都市形態
であり、伝馬などの陸上交通での輸送機能と旅籠をはじめ
とする宿泊施設が併設された。

東海道の宿場町には小田原や沼津などの城下町、川崎
や三島などの門前町として栄えた町もあった。さらに、東
海道には峠や海上渡し、架橋されていない大河川などの
難所と呼ばれる箇所があり、難所に近隣する宿場町は難
所越えの拠点として栄えていたという記述が見られる。

3. 想起素材の存在状況

(1) 旧跡

近世の想起素材として、宿場町であったことを現代に
伝える石碑や建造物（以後、「旧跡」と呼ぶ）がある。宿
場町特有の施設として、本陣・脇本陣・問屋場・高札
場・旅籠の5施設（以後、「街道施設」と呼ぶ）を対象と
する。街道施設の旧跡が旧宿場町における近世の想起素
材であるとし、その存在状況について調査する。

(2) 旧跡の存在状況

旧宿場町を含む自治体がHPに掲載している「町めぐり
マップ」「町の見どころマップ」に加え、ガイドブック
『「歩いて旅する東海道」（山と溪谷社）』を用い、各
旧宿場町内のマップ内に書かれている街道施設の旧跡を
抽出し、その形態をGoogle マップ ストリートビューで確
認した（表1）。抽出した旧跡の形態を以下の4パターン（図
1）に分類し、旧宿場町ごとに整理する。

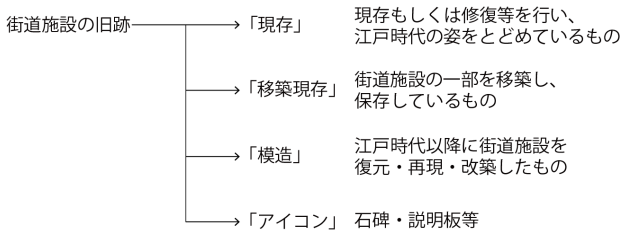


図1 旧跡の形態

(3) 宿場町の類型化

旧宿場町内にある旧跡の形態によって宿場町を以下の基
準（図2）によって段階的に5グループ（以後、「想起素材
類型」と呼ぶ）に分類した（図3）。[図1 旧跡の形態]
において上位にある形態からは、かつての情報を多く得る

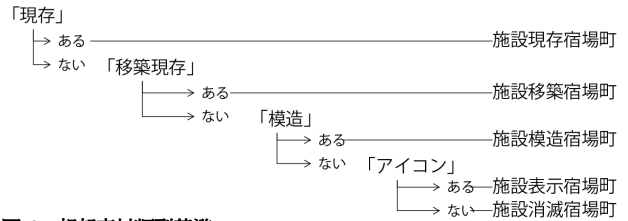


図2 想起素材類型基準

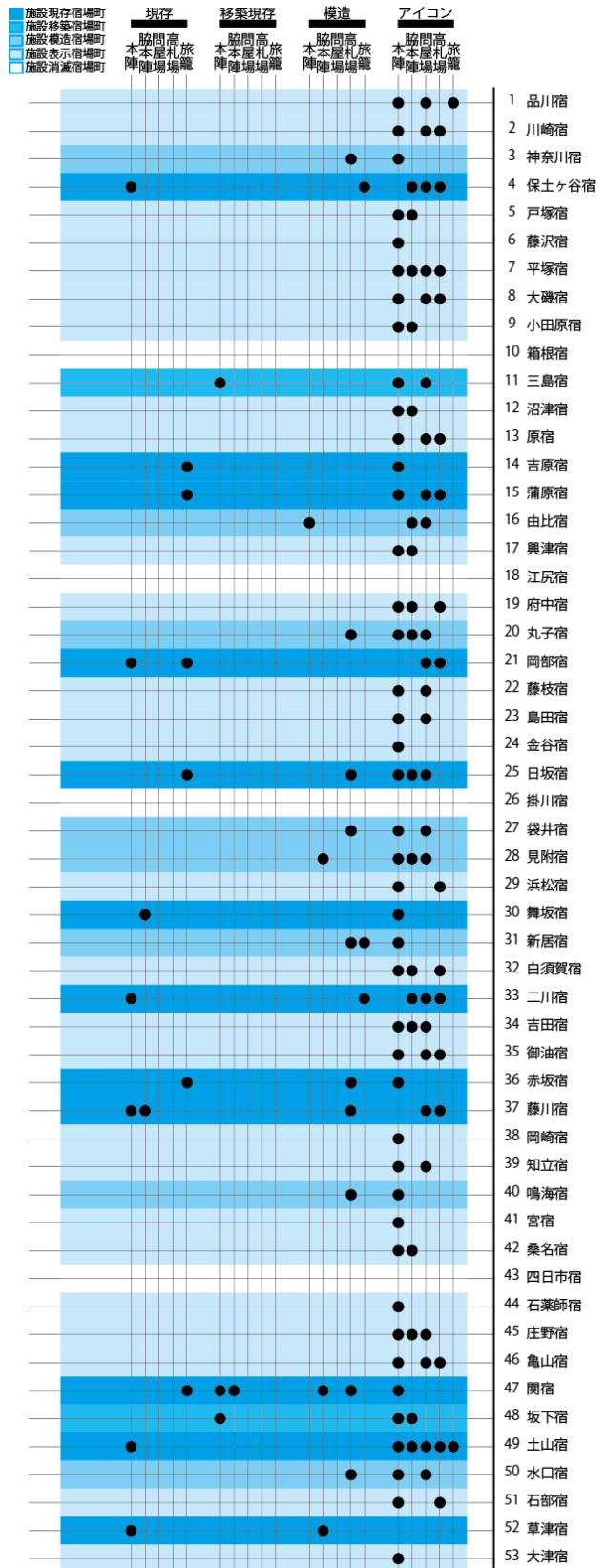


図3 想起素材類型

表 1 街道施設の旧跡及び形態

宿名	本陣	脇本陣	問屋場	高札場	旅籠
1 品川	聖跡公園・品川宿本陣跡(公園・石碑)	-	問屋場跡(プレート)	-	旅籠屋釜屋跡(説明板)
2 川崎	田中本陣跡(説明板)	-	問屋場跡(説明板)	高札場跡(説明板)	-
2 川崎	佐藤本陣跡(説明板)	-	-	-	-
3 神奈川	本地跡(説明板×2)	-	-	高札場(復原)@神奈川県地区センター	-
4 保土ヶ谷	軽部本陣跡(通用門・石碑・説明板)	脇本陣跡(標柱・説明板)	問屋場跡(説明板)	高札場跡(標柱)	旅籠本金子屋(1869年(明治2年)に建て替え)
5 戸塚	内田本陣跡(説明板)	脇本陣跡(標柱)	問屋場跡(特になし)	-	-
5 戸塚	澤邊本陣跡(説明板・石碑)	-	-	-	-
6 藤沢	本陣跡標柱(説明板)	-	-	高札場跡(特になし)	-
7 平塚	本陣旧蹟碑(標柱)	脇本陣跡碑(石碑・説明板)	東組問屋場跡碑(石碑・説明板)	高札場跡碑(石碑・説明板)	-
7 平塚	-	-	西組問屋場跡碑(石碑・説明板)	-	-
8 大磯	石井本陣跡(碑はない)	-	北組問屋場跡(説明板)	高札場跡(説明板)	-
8 大磯	小島本陣跡(石碑)	-	南組問屋場跡(説明板)	-	-
8 大磯	尾上本陣跡(石碑)	-	-	-	-
9 小田原	清水金左衛門本陣跡(小公園・石碑)	脇本陣古清水旅館跡(説明板)	-	-	-
9 小田原	片岡本陣跡(石碑)	-	-	-	-
10 箱根	-	-	-	-	-
11 三島	世古本陣跡(石碑、門は長圓寺の山門に)	-	問屋場跡(説明板)	-	-
11 三島	樋口本陣跡(石碑・説明板・門は圓明寺の山門に)	-	-	-	-
12 沼津	間宮本陣跡(石碑)	中村脇本陣跡(石碑)	-	-	-
12 沼津	清水本陣跡(石碑)	-	-	-	-
13 原	渡辺本陣跡(説明板)	-	問屋場跡(説明板)	高札場跡(説明板)	-
14 吉原	下本陣跡(舗装プレート) 上本陣跡(舗装プレート)	-	-	-	鯛屋旅館(1682年より営業)
15 蒲原	本陣跡佐藤屋(説明板)	-	問屋場跡(説明板)	高札場跡(説明板)	旅籠和泉屋・お休み処(天保年間に建てられた)
15 蒲原	-	-	-	-	-
16 由比	本陣(由比本陣公園(正門・石垣・表門・木柵・馬の水飲み場))	脇本陣温純屋(説明板)	問屋場跡(説明板)	-	-
16 由比	-	羽根ノ屋(脇本陣)(説明板)	-	-	-
16 由比	-	徳田屋(特になし)	-	-	-
17 興津	東本陣跡(石碑)	一碧楼水口屋跡脇本陣(石碑・ギャラリー)	-	-	-
17 興津	西本陣跡(石碑)	-	-	-	-
18 江尻	-	-	-	-	-
19 府中	下伝馬本陣・脇本陣跡(石碑・説明板)	下伝馬本陣・脇本陣跡(石碑・説明板)	-	札の辻(石碑)	-
19 府中	上伝馬本陣・脇本陣跡(石碑・説明板)	上伝馬本陣・脇本陣跡(石碑・説明板)	-	-	-
20 丸子	本陣跡(石碑・説明板)	脇本陣跡(石碑・看板)	問屋場跡(看板)	高札場跡(復元)	-
21 岡部	本陣跡(仁藤)(痕跡なし)	-	問屋場跡(説明板)	高札場跡(説明板)	大旅籠柏屋歴史資料館(1836年に完成した)
21 岡部	本陣跡(内野)(将軍福将、井戸は往時のまま。表御門と塀を推定復元)	-	問屋場跡(説明板)	-	-
22 藤枝	下本陣跡(舗装プレート)	-	問屋場跡(上り)(舗装プレート)	-	-
22 藤枝	上本陣跡(舗装プレート)	-	問屋場跡(下り)(舗装プレート)	-	-
23 島田	本陣跡(石碑・説明板)	-	問屋場跡(石碑・説明板)	高札場跡(特になし)	-
23 金谷	佐塚本陣跡(石碑)	-	-	-	-
24 金谷	本陣跡(柏屋)(石碑・灯籠)	-	-	-	-
25 日坂	片岡本陣跡(石碑・説明板)	脇本陣・黒田屋跡(説明板)	問屋場跡(説明板)	高札場(復原)	川坂屋(1852or1854後建築)
25 日坂	-	-	-	-	萬屋(江戸時代そのまま)
26 掛川	本陣跡(特になし)	-	問屋場跡(特になし)	-	-
27 袋井	袋井宿東本陣公園(公園、説明板)	-	問屋場跡(標柱)	本町宿場公園に再現	-
27 袋井	中本陣跡(標柱)	-	-	-	-
27 袋井	西本陣跡(標柱)	-	-	-	-
28 見付	北本陣跡(看板)	脇本陣跡(看板)	問屋場跡(看板)	高札場(特になし)	-
28 見付	南本陣跡(特になし)	脇本陣 大三河屋門(移築復元)	-	-	-
29 浜松	佐藤本陣跡(説明板)	-	-	高札場跡(説明板)	-
29 浜松	杉浦本陣跡(説明板)	-	-	-	-
29 浜松	川口本陣跡(説明板)	-	-	-	-
29 浜松	梅谷本陣跡(石碑・説明板)	-	-	-	-
30 舞阪	本陣跡(石碑)	舞阪脇本陣跡(1838年に建てられ、書院様が残されている。1998年創建時の建物が復元)	-	-	-
31 新居	疋田弥五郎本陣跡(特になし)	-	-	高札場(復元)	紀伊国屋資料館(明治初めの再建)
31 新居	飯田武兵衛本陣跡(石碑・説明板)	-	-	-	-
31 新居	疋田八郎兵衛本陣跡(石碑・説明板)	-	-	-	-
32 白須賀	本陣跡(石碑・説明板)	脇本陣跡(石碑)	-	高札場跡(石碑)	-
33 三川	三川宿本陣資料館(享保年間建築の土蔵、1753建築の主屋、1807建築の玄関棟・表門)	脇本陣跡(説明板)	西問屋場跡(石碑)	高札場跡(石碑・灯籠)	清明屋(主屋、繋ぎの間、奥座敷等を復原)
33 三川	-	-	東問屋場跡(石碑)	-	-
34 吉田	本陣跡(石碑・説明板)	脇本陣跡(石碑)	問屋場跡(標柱)	-	-
35 御油	御油本陣跡(石碑・説明板)	-	問屋場跡(説明板)	高札場跡(説明板)	-
36 赤坂	本陣跡(説明板)	-	-	高札場跡(再現)	大橋屋(1715頃建築の建物)
37 藤川	藤川宿本陣跡広場(公園・石碑・高札場(復元)・石垣が現存)	藤川宿資料館(脇本陣跡)(門構えが現存)	問屋場跡(石碑・説明板)	高札場跡(説明板)	旅籠つる屋跡(特になし)
38 岡崎	西本陣跡(石碑・説明板)	-	-	-	-
39 知立	本陣跡(石碑・説明板)	-	問屋場跡(石碑)	-	-
40 鳴海	本陣跡(説明板)	-	-	鳴海宿高札場(復元)	-
41 宮	赤本陣跡(説明板)	-	-	-	-
42 桑名	大塚本陣跡(説明板)	脇本陣跡(説明板)	-	-	-
43 四日市	-	-	-	-	-
44 石薬師	小澤(本陣)資料館(説明板)	-	-	-	-
45 庄野	庄野本陣跡碑(石碑)	脇本陣跡(説明板)	問屋場跡(説明板)	-	-
46 亀山	本陣跡(説明板)	-	西町問屋場跡(説明板)	高札場跡(説明板)	-
47 関	川北本陣跡(石碑・玄関門は延命寺に移築)	萩野脇本陣の門(福蔵寺に移築)	-	高札場跡(再現したよう)	関宿旅籠玉屋歴史資料館(修復)
47 関	伊藤本陣跡(石碑)	鶴屋脇本陣跡(再現したよう)	-	-	会津屋(修復)
48 坂下	松屋本陣跡(石碑・門は法案寺に移築)	小竹屋脇本陣跡(石碑)	-	-	-
48 坂下	梅屋本陣跡(石碑)	-	-	-	-
48 坂下	大竹屋本陣跡(石碑)	-	-	-	-
49 土山	旧土山本陣跡(石碑・上段の間)	二階脇本陣跡(石碑)	問屋場跡(石碑・説明板)	高札場跡(石碑)	平野屋跡(石碑・説明板)
49 土山	大黒屋本陣跡(石碑・説明板)	-	土山宿問屋場跡(石碑)	-	并間屋跡(石碑・説明板)
50 水口	本陣跡(石碑・説明板)	脇本陣跡(特になし)	問屋場跡(説明板)	高札場跡(再現したよう)	-
51 石部	石部宿小島本陣跡(石碑・説明板)	-	-	高札場跡(看板)	-
51 石部	三大寺本陣跡(特になし)	-	-	-	-
52 草津	史跡草津宿本陣	草津市観光物産館脇本陣(町屋風の建物を復元)	-	-	-
53 大津	大津宿本陣跡(石碑・説明板・標柱)	-	-	札の辻(特になし)	-

ことができると考え、「施設現存宿場町」から「施設消滅宿場町」の分類は、旧宿場町内の想起素材から得られる情報量の違いを示している。上位の形態の旧跡を有する旧宿場町は、地域内に存在する旧跡の種類も比較的多いことが明らかとなった。

4. 土地利用状況

(1) 用途地域

旧宿場町の用途地域を調査することで、現代における都市計画における位置付けを把握する。本来、想起素材を取り巻く環境として実際の土地利用を調査すべきであるが、本研究ではその前段として、地域の土地利用を規定する用途地域をその地域の環境として代用することとする。

旧街道に沿って宿場町の範囲を規定し、都市計画図にその範囲の旧街道を重ね、どのような用途地域を通っているかを計測する。用途地域によって「住居系」「商業系」「工業系」「市街化調整区域」「都市計画区域外」「白地地域」に分ける。宿場町内の旧街道の全長に対する各用途地域を通る部分の長さの割合を示す。

(2) 宿場町の類型化

宿場町内の旧街道の全長に対する商業系・住居系土地利用の割合を元に以下の基準(図4)で段階的に宿場町を6グループ(以後、「土地利用類型」と呼ぶ)に分類した(図5)。類型によって住居系の土地利用が想定されている地域か、商業系の土地利用が想定されている地域かを大まかに示している。

5. 地域間の差異

(1) 類型指数

各旧宿場町において、想起素材の存在状況・土地利用状況が明らかになった。53地域において「地域間の差異」を示すために、以下で「53地域における類型のばらつき」と「隣り合う地域間の類型の差異の期待値」を算出する。

そこで、3(3).、4(2).で分類した想起素材類型・土地利用類型にそれぞれの以下の数値(表2)(表3)をふる(以後「類型指数」と呼ぶ)(表4)。この数値は、便宜上数字をふったものであり、数字自体は特に意味を持たず、数値に1以上差があると類型に1つ以上差異があるということを示すものである。

(2) 53地域における類型のばらつき

53地域における類型のばらつきを示すために、想起素材類型・土地利用類型の類型指数の標準偏差($S_{\text{想起素材}}$ ・ $S_{\text{土地利用}}$)を算出する。標準偏差を算出することにより、任意の地域の類型と平均的な類型の差の期待値を明らかにする。すなわち、1地域を訪れた際の、53地域の全体像の想像しにくさを示す。

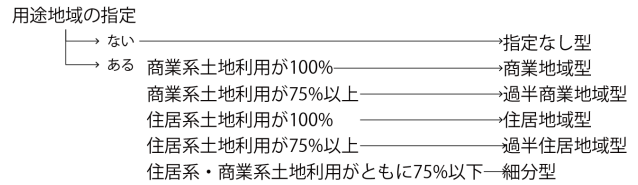


図4 土地利用類型基準

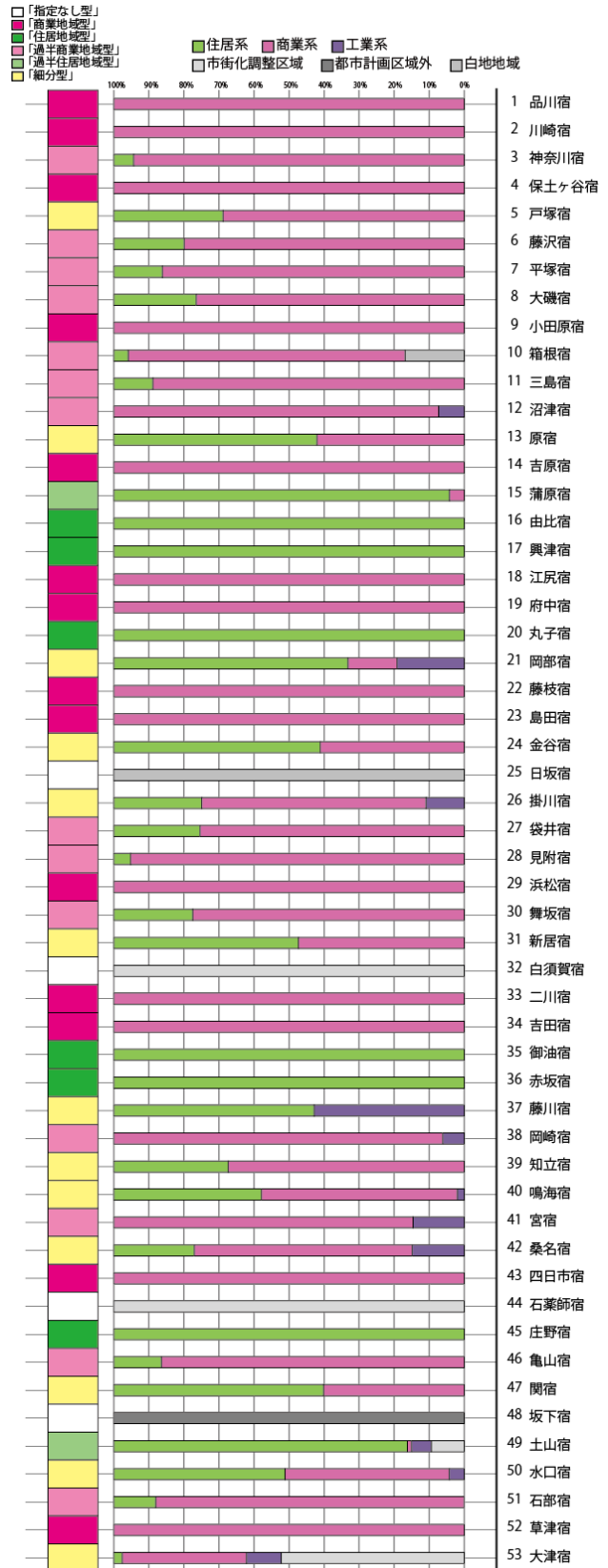


図5 旧宿場町の土地利用類型及び用途地域構成比

表 2 想起素材類型指数

施設現存宿場町	5
施設移築宿場町	4
施設模造宿場町	3
施設表示宿場町	2
施設消滅宿場町	1

表 3 土地利用類型指数

商業地域型	2
過半商業地域型	1
住居地域型	-2
過半住居地域型	-1
細分型	0
指定なし型	0

表 4 宿場町毎の類型指数

宿名	旧跡	用途地域
1 品川	2	2
2 川崎	2	2
3 神奈川	3	1
4 保土ヶ谷	5	2
5 戸塚	2	0
6 藤沢	2	1
7 平塚	2	1
8 大磯	2	1
9 小田原	2	2
10 箱根	1	1
11 三島	4	1
12 沼津	2	1
13 原	2	0
14 吉原	5	2
15 蒲原	5	-1
16 由比	3	-2
17 興津	2	-2
18 江尻	1	2
19 府中	2	2
20 丸子	3	-2
21 岡部	5	0
22 藤枝	2	2
23 島田	2	2
24 金谷	2	0
25 日坂	5	0
26 掛川	1	0
27 袋井	3	1
28 見付	3	1
29 浜松	2	2
30 舞阪	5	1
31 新居	3	0
32 白須賀	2	0
33 二川	5	2
34 吉田	2	2
35 御油	2	-2
36 赤坂	5	-2
37 藤川	5	0
38 岡崎	2	1
39 知立	2	0
40 鳴海	3	0
41 宮	2	1
42 桑名	2	0
43 四日市	1	2
44 石薬師	2	0
45 庄野	2	-2
46 亀山	2	1
47 関	5	0
48 坂下	4	0
49 土山	5	-1
50 水口	3	0
51 石部	2	1
52 草津	5	2
53 大津	2	0

標準偏差 $S_{\text{想起素材}} \cdot S_{\text{土地利用}}$ は次のようになる。

$$S_{\text{想起素材}}=1.31$$

$$S_{\text{土地利用}}=1.24$$

想起素材類型・土地利用類型の類型指数の標準偏差は、ともに1を超えている。これは、任意の1地域は53地域の平

均から1つ以上類型が異なっていることが期待できることを示す。つまり、1つの地域を訪れただけでは、その地域は、想起素材・土地利用に関して、53地域の平均的な地域とは異なった類型をしている可能性が高いということである。これは人々に複数の地域を訪れることを喚起する可能性があるだろう。

(3) 隣り合う地域間の類型の差異の期待値

勝野³⁾らが示した「係留効果」という認知バイアスを参照すると、直前に目にした宿場町の想起素材の存在状況や土地利用のされ方が、新たに訪れる宿場町のイメージ形成に影響を及ぼすことが想像される。連続的に旧宿場町を体験する際には隣り合う地域間の差異は、次の地域を訪れる動機にもなりうると考えられ、重要であると考えられる。

そこで隣り合う地域間の類型の差異を示すために、想起素材類型・土地利用類型の変化量の期待値 ($\mu_{\text{想起素材}} \cdot \mu_{\text{土地利用}}$) を53地域において算出する。変化量の期待値を算出することにより、任意の地域から次の地域に足を運ぶ際に、次の地域に変化をどれほど期待できるかを明らかにする。

期待値 $\mu_{\text{想起素材}} \cdot \mu_{\text{土地利用}}$ は以下ようになる。

$$\mu_{\text{想起素材}}=1.38$$

$$\mu_{\text{土地利用}}=1.15$$

想起素材類型・土地利用類型の類型指数の隣り合う地域間の変化量は、ともに1を超えている。これは、次の地域には直前の地域とは異なった想起素材・土地利用類型が期待できることを意味している。次の地域に差異が期待出来ることは、旧宿場町に連続的に訪れることを喚起する可能性があるだろう。

(4) 「宿場町をめぐる旅」の考察

以上の結果から宿場町をめぐる旅を考察する。

東海道の宿場町であった53の地域において想起素材・土地利用は様々であり、1地域を訪れただけでは現在の平均的な旧宿場町像を判断することはできない。また、その隣の地域には、その地域とは異なったかたちで宿場町の片鱗を残している地域があることが期待される。

旧宿場町をめぐる人々は、東海道の旧宿場町の一連のシリーズにおいて、想起素材と用途地域という2項目については「地域間の差異」を感じることができるといえる。現代に東海道の宿場町をめぐる人々は「地域間の差異」を体験することに、連続して宿場町を訪れる魅力を感じている可能性が示唆された。

そもそも、東海道の旧宿場町には、1地域のみ重要伝統的建造物群保存地区に指定されている関という地域がある。この地域には、当時の旅籠が現存していたり、本陣・脇本陣の門が移築現存されていたり、また多くの建造物が近世と似た外観を留めている。関という、宿場町の“理想モデル”ともいえる地域があるのに対し、現代におい

て人々が他の52の地域にも足を運ぶのはなぜなのか。今回の調査により、他の地域との関連の中で連続的に旧宿場町を訪れることで、その地域特有の町並みの変遷を感じることができるということにその答えの一つがある可能性が考えられる。

近年、歴史文化を伝える地域に多くの観光客が訪れているという。しかし、このように考えると、必ずしも昔の姿を留めること、昔ながらの街並みを模造することのみが歴史文化を伝える解ではない。

わが国は、戦後驚異的な経済復興を果たし、その発展は世界の奇跡といわれた。しかし、その間、農山村などでは過疎化が起り、日本の伝統的な建物や歴史的な町並みはメンテナンスがされなくなり、次々と崩壊の危機にさらされた。この歴史もまたおろそかにしてはならぬ歴史文化だろう。現代に関には宿場町当時と似た町並みがある一方、宿場町という共通の歴史的背景を持ちながらも、建造物や町並みが崩壊した地域が多い。しかし、宿場町であったことは、様々な形態の想起素材により伝承されていることが明らかになった。どの地域にも固有の歴史があり、町並みの変化は地域ごとに異なるだろう。現代の土地利用の中にある様々なかたちをした想起素材こそ、脈々と継承されてきたその街並み特有の歴史を示すものであり、真に歴史文化を伝える要素と言えないのではないだろうか。また、複数の地域を連続的に訪れることは、各地域における町並みの変遷の違いを顕在化し、より印象的に感じさせる効果を持つと考えられる。

歴史文化を伝える地域に多くの観光客が訪れる近年において、「宿場町をめぐる旅」などの共通の歴史的背景を有する地域をめぐる旅は、歴史の移ろいや変化に着目した新たな観光まちづくりの可能性を示唆していると言える。

6. 結論

- ・現在の宿場町に残る想起素材の存在状況・土地利用状況を明らかにした。歴史の移ろいの中で宿場町ごとに異なる変化をした街並みの中に、様々な状態で想起素材が存在する現実が明らかになった。
- ・53地域を、地域内にある想起素材の形態によって段階的に5つの類型に分類し、また、同様に地域内の用途地域によって段階的に6つの類型に分類した。任意の1地域を選ぶと、想起素材・用途地域ともに平均的な類型と1類型以上異なっていることが期待されることが算出された。さらに、53地域を通じて平均すると、隣り合う地域間においても類型が想起素材・用途地域ともに1類型以上異なることが期待されることが算出された。
- ・ある共通の歴史的背景を持つ地域において、昔の街並みを保全すること、伝統的な街並みや町屋風の建物を

再現することだけではなく、歴史の移ろいによる町並みの変化の差異に着目する観光まちづくりの在り方の可能性を示唆した。

付録

参考文献

- 1) 久木真代ら「歴史文化的資源の観光利用に関する研究・愛知県内旧東海道沿いを対象として - 伝統的居住文化の維持・保全と観光開発の共生に関する研究その6 -」 日本建築学会大会学術講演梗概集 2012
- 2) 岩井正「伝建地区（伝統建造物群保存地区）の現状と課題 -伝建地区全国アンケートからみたまちづくりのサステナビリティ-」 創造都市研究e 2007
- 3) 勝野悠作ら「係留効果による店舗イメージ認識の相対性」 景観・デザイン研究講演集 2010
- 4) 道尾淳子「中山道分間延絵図にみる宿場町の境界表現に関する研究 中山道宿場町67宿を対象として」 日本建築学会北海道支部研究報告集 2011
- 5) 児玉幸多『日本史小百科宿場』 東京堂出版 1999
- 6) 児玉幸多『近世交通史4東海道宿村大概帳』 吉川弘文館 2013
- 7) 「歩いて旅する東海道」 山と溪谷社 2015